

a 学校教育目標	かしこく なかよく げんきよく	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション(自校の使命)】 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン(自校の将来像)】 児童が満足する学校、保護者が安心する学校、地域が誇りに思う学校、そして教職員が生き甲斐や行き甲斐を感じる学校。
----------	-----------------	----------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------

評価計画				自己評価						改善方針	学校関係者評価					
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	改善方針	評価					
					h 達成値	h 達成値					イ	ロ	ハ			
確かな学力	すすんで学び、よく考え豊かに表現する学力を育てる。	基礎・基本の学力向上	○主体的な学びにつながる授業の実施 ・児童の課題意識を生み出す発問構成の工夫 ・百マス計算での基礎学力の定着 ・ICTの活用	【各種学力調査】 ①単元末テスト(算数)の正答率 85% ②全国学力・学習状況調査の正答率、全国平均以上 100% ③NRT(学力テスト)の正答率、全国平均以上 100% 【児童アンケート】 ①「算数の授業が楽しい」85% ②「算数の授業がよく分かる」85%	85% 【100%】	84% 【96%】		99% 【96%】	B	【各種学力調査】 ①知識技能88% 思考・判断・表現78% ②国語64(対全国比-3.2)95% 算数58(対全国比-4.5)93% ③国語48.6(対全国比-1.4)97% 算数48.8(対全国比-1.2)98% 理科47.8(対全国比-2.2)96% 【児童アンケート】 ①84% ②84% ○NRTはほぼ全国平均となった。 ●全国学力学習状況調査は全国平均を少し下回る結果となった。 ●単元末テストでの学年ごとの差が依然として大きい。特に、思考力・判断力・表現力の正答率向上が課題である。	○基本的な学力の向上に向けて以下の取組を継続して行う。 ・ユニバーサルデザインの授業づくり ・ICT機器の効果的な活用 ・ドリルタイムや家庭学習と授業の関連付け ・「百マス計算」の継続 ・「放課後学習」の活用 ○全国学力学習状況調査の結果分析を反映させた授業づくりを行う。(例:計算技能の習熟のみでなく、仕組の理解に重点を置いた授業)	2	イ	ロ	ハ	・適正に評価されている。 ・子ども達は、しっかりと落ち着いて学習している。 ・教師の声のトーンが気になる。教師の声の小さい学級は、児童の声も小さくなる。活気のある声や表情豊かに発問していくことで児童を授業に引きこむことができる。 ・めあてを5分以内に書かせる等、授業の中で児童を鍛え上げることができる。 ・学力の向上には余地がある。授業の中で鍛え切れていないように感じる。
			○学習規律の徹底(4月中に達成) ・チャイムの順守 ・学習環境の整備(机の上、筆箱) ・返事の定着(名前を呼ばれたら「はい」)	【児童アンケートの肯定的評価】 ①「授業の始まりと終わりのチャイムを守っていますか。」 ②「机の上や筆箱など、身の回りを整えて学習していますか。」 ③「名前を呼ばれたら返事をしていますか。」	95%	91%		96%	B	【児童アンケート】 ①91% ②89% ③94% ●3項目とも達成とはならなかった。 ●重点取組期間を設定し一定の成果は見られたが、統一した指導を行い切ることができなかった。	○学習規律の重点取組項目と期間を設定し、全校で統一した指導を行うことで、どの学級でも同じ学習規律のもと授業を行うことができるようにする。					
豊かな心	地域を愛する心を持つとともに、夢や目標をかなえるための生活習慣身に付けさせる。	完全不登校の根絶	○不登校の未然防止 ・年に2回実施するQ-Uを基に、構造的グループエンカウンターなどの計画的な実施 ・全職員による児童実態の連携実施 ・関係機関との協働的な連携実施	①不登校児童、昨年度以下 ②「学級生活満足群」に属する児童の割合の上昇。「学級生活不満足群」や「要支援群」に属する児童の割合の減少。(1回目と2回目を比較して)	85%	68%		80%	B	①昨年度不登校児童3名(9月末) 今年度不登校児童7名(9月末) ②学級生活満足群 68%(昨年度)→59%(今年度) 学級生活不満足群 10%(昨年度)→13%(今年度) 要支援群 2%(昨年度)→3%(今年度) ●不登校児童7名中2名は、SRへ登校することも難しい実態がある。 ●学級生活に不満をもっている児童の割合が、昨年度と比較して微増している。	○学級生活不満足群や要支援群に属する児童を抽出し、アンケート結果から要因分析を行う。 ○要因分析をもとに、集団作りについて学年で取り組みを決定する。その際、構造的グループエンカウンターについても、月毎の計画表を学年ごとに再考し、見直しをもった集団作りを行う。 ○不登校児童の減少に向けて、SRや心の相談室等を活用するとともに、電話連絡や定期的な家庭訪問により、学校とのつながりを継続する。	2	イ	ロ	ハ	・適正に評価されている。 ・普段、「です・ます」を付けて話すことができず、単語で話す児童が多い。できていない児童はほめていく。周りの大人も「です・ます」をつけない児童の話し方を許しているのではない。言葉で話して思いを伝えることが、文章で表せるようになることにつながると考える。 ・児童の体に合った机といすの高さになっていない場合がある。体のバランスを考え、学習や食事の面に影響が出ないよう細かく調整するとよい。
			○小中スタンダード(SDNあいさつ、言葉遣い)の定着 ・児童会役員によるあいさつ運動の実施 ・相手に応じた丁寧な言葉遣いの指導	【児童・保護者・教員アンケートの肯定的評価】 ①「SDN(先に誰にでも何度でも)のあいさつができていますか。」 ②「『です』、『ます』をつけて、ていねいに話していますか。」	85%	83%		98%	B	【児童、保護者、教職員アンケート】 ①81.2%(保護者64.0%、児童79.8%、教職員100%) ②85.2%(保護者65.9%、児童89.7%、教職員100%) ○昨年度と比べ、保護者の評価が上がっていることから、学校の一貫した指導が伝わっていると考えられる。 ●SDNあいさつの具体的な理想の姿を教員、児童が共有し切れていない。自分達がどのようなあいさつをしたいのか、どのようなあいさつを広げていきたいのか、児童が自己決定する場が必要だと考える。	○あいさつ週間の前に、自分達の学級が目指すあいさつ目標を考え、集団決定する時間を確保する。考えた目標を「あいさつ宣言」として全校に放送で伝え、実践・評価する機会を作る。					
健やかな体	体力を高め、感染症予防に対する高い意識を育てる。	新体力テスト結果の向上	○運動能力の向上 ・運動量を確保する体育授業の工夫を共有化 ・4月と11月の長座体前屈計測で向上率確認 ・年間を通じて外遊びや縄跳びなどの啓発	【4月・11月の長座体前屈の記録】 ①県及び全国平均値以上 75%以上	75%	53%		71%	C	【4月の長座体前屈の記録】 ①53.1% ●目標値を下回った。 ●昨年度比+13.3%で改善傾向であるが、依然として柔軟性に課題が見られる。	○2学期以降、朝学習の時間に週1回のストレッチに取り組ませることで、柔軟性の向上を図っている。 ○体育の準備運動での柔軟運動や、遊具の順番を決めたサーキット運動に取り組む。全校で統一した指導を行うことにより、運動量を確保しながら、児童の運動に対する意欲向上を図る。	2	イ	ロ	ハ	・適正に評価されている。 ・運動能力の低い児童が多いのは、小学校から携帯を与え、ゲームをしたり外遊びをしていなかったりしていることが影響しているのではないかと考える。
			○病気や感染症予防に対する行動の向上 ・ハンカチ持参の強化週間を設定 ・ICTを活用した手洗い方法の指導 ・授業や各種便りを活用した啓発	【ハンカチ点検】 ①ハンカチ持参率 90%以上 【児童意識調査の肯定的評価】 ①手洗い実施、ハンカチ持参に関する肯定的評価 90%以上	90%	93%		102%	A	【ハンカチ点検】①持参率93% 【児童アンケート】①91%	○ハンカチを忘れる児童の家庭との連携を図ると共に、今後も実態把握と啓発を行う。 ○予備のハンカチをランドセルに入れておくことを、学年通信等で呼びかける。					
信頼される学校	地域や家庭の願いに応えるとともに、15年間を見据えた教育を行う。	働き方改革の推進	○時間外勤務月45時間以内を完全実施 ・月間勤務時間合計の確認、助言 ・行事、事務作業の計画、精選 ・教材の共有化	【超過勤務 月45時間以内】 ①在校時間一覧表による超過勤務時間 【教職員アンケートの肯定的評価】 ①「現在、生き甲斐や行き甲斐を感じることができている。」	90%	91%		101%	A	【超過勤務 月45時間以内】 ①4~9月までの月45時間以内の割合86.9%(重点月のうち7・8月は100%) 組織的に見直しをもった働き方ができている。 【教職員アンケートの肯定的評価】 ①95.6% 生き甲斐や行き甲斐を感じながら業務にあたっている。	○年間の働き方改革重点月への取組を行う。(重点月5・6・7・8・12・1・2月) ○成績処理時間の確保等による時間による持ち帰り業務の軽減を図る。 ○相互にコミュニケーションを図り、困り感を共有できる職場環境をつくる。	2	イ	ロ	ハ	・適正に評価されている。
			○地域に信頼される学校づくり ・年間計画及び、時期に応じた服務研修実施 ・1年に2回、保護者・児童アンケート実施	【児童アンケートの肯定的評価】 ①「田野浦小学校に通ってよかったと思えますか。」 【保護者アンケートの肯定的評価】 ①「学校は安心して子どもを通わせることができる教育を行っている。」	95%	95%		100%	A	【児童アンケート】①94% 【保護者アンケート】①96% ○服務研修は計画的に実行できている。 ○コロナ禍以前の様な学校行事や参観日、水泳学習、校外学習等の取組や振り返り等を行うことで、達成感や自己肯定感を高めることができた。 ●6%の児童が、学校に対して、不安や不満な気持ちをもっている。 ●ホームページの更新が少ないので、学校のことが分かりにくいとアンケートに記述した家庭がある。	○学校に対する不安な気持ちをもっている児童の実態把握を行う。その後、その児童や学級集団への適切な取組を組織的に考え、実行する。 ○情報教育担当と連携して、ホームページを更新したり、「すぐる」を活用して、保護者が学校行事を確認しやすいようにする。					

本年度の重点目標については◎印で示す
 【j】: 自己評価 評価
 A: 100 ≤ (目標達成) B: 80 ≤ (ほぼ達成) < 100
 C: 60 ≤ (もう少し) < 80 D: (できていない) < 60

【l】: 学校関係者評価 評価
 イ: 自己評価は適正である。 ロ: 自己評価は適正でない。
 ハ: 分からない。